

## 序 論

- 先週から、ダニエルとその3人の友人たちの生きざまを通して、私たちのこの世に生きるクリスチャンとしての生き方を学び始めた。
- ダニエルとその3人の友人たちとはどんな人物であったのか？ 彼らについて少し復習したい。
  1. 彼らは、イスラエル人であった。イスラエルは当時、国としてバビロン帝国との戦に敗れ、敗戦国として、捕虜の国、属国となっていた。
  2. バビロンの王ネブカデネザルは、その占領政策として、イスラエルからの多くの捕虜を連れて来ていたが、特に、その内から、家柄が良く、容姿端麗、頭脳明晰で優秀な人物を選び、訓練して彼らを自らの側近にしようとした。
  3. ここに登場するダニエルと3人の友人たちは、そのエリート・グループに選ばれたのである。
  4. 即ち、ダニエルたちは、異教の国で、しかも、その国の中枢部で、異教の専制君主に仕えたのである。政教(政治と宗教)が分離するどころか、神聖政治(Theocratic)の時代のただ中である。
- これが、ダニエルと友人たちの生きていたい人生と生活の状況であった。
- 実は、ここに、彼らの生き様を学ぶことの意義がある。なぜなら、私たちも、ダニエル達と同様に、クリスチャンとして異教の世界に生きているからである。
- このような状態は、日本は勿論のこと、アメリカでも、同様になりつつある。
  1. 先日も、コミュニティーセンターのチャペルで、参加者の方から「アメリカは一体、キリスト教国と言えるのか？」という質問があった。そう思えない状況が余りに多く見られるからである。
  2. もう数十年前に、すでに、ピリーグラハムは言った。「今や、アメリカは、宣教師を送り出す国と言うより、宣教師を送ってもらう必要のある国となりつつある」と。
- そのような異教国と社会に生きるクリスチャンとして、ダニエルと友人たちの生き様から学ぶようにと、聖書は、彼らのことを私たちに書き残したのである。
- 聖書は「この世に生きるクリスチャンの生き方」に関するメッセージで満ちている。聖書が：
  1. 第一に強調していることは、クリスチャンは、イエス様の血潮によって罪の世から救い出されたものであるが、同時に、イエス様によってその罪の世に再び遣わされたものである。
    - (1)だから、イエス様がそうであったように、修道院や教会の中に、或いは、宗教界の中にだけ留まっていたはならない。
    - (2)地の塩、世の光として、世に出て行かなければならない。
  2. 第二に強調していることは、同時に、世と妥協してはならない、ということである。
    - (1)ローマ12章2節「世と妥協してはならない」「世と調子を合わせてはならない」
    - (2)Iヨハネ2章15節「世(の物とスピリット)を愛してはならない」
    - (3)その失敗例として聖書が挙げているのが、「ロトの妻」である。
      - 彼女は、世的な街の象徴とも言えるソドム・ゴモラの町に住んでいるうちに、すっかり世的、物欲的な人となってしまっていた。
      - 信仰はもっていても、最早それは彼女の人生の一番大切なことではなかった。
      - やがて彼女はそのような人生の結末を自らが「塩の柱」になることで刈り取ったのである。
    - (4)このような聖書のメッセージをよく言い表している日本のことわざがある。クリスチャンが、「虎穴に入らざれば虎子を得ず」と世に入って行くが、しばしば見ることは、「ミイラ取りがミイラになってしまう」という事実である。
    - (5)度々申し上げる「船と水」の関係も忘れないで欲しい。船(クリスチャン)は水(世)に触れてなければならない。しかし、水が船の中に入ったら、船は沈む運命しかない。
    - (6)残念なことは、沢山のクリスチャンたちが、世に住んでいるうちに、「妥協」の生活になっていることである。別の言い方をすると、「二刀流」のクリスチャンになっているのである。
      - 日曜日は教会に出席する誠実なクリスチャンであるが、月曜から金曜日、時には土曜日も、周囲の人とどこも変わらないこの世の人である。外側だけでなく、中味までも。
      - だから時には、その人がクリスチャンであることを周りの人はほとんど知らない。彼らは二つの顔を持っている。教会の顔と世の中の顔である。現代の「隠れキリシタン」とも言える。

- ダニエルと友人たちの生き方は、そのようなチャレンジと課題の中に生きる私たち現代のクリスチャンにとって、モデルであり、励ましである。

- さて、ここで、今日学ぼうとしている出来事について、その背景を簡単にまとめたい。
  1. ネブカデネザル王は、暴君、専制君主として、色々なことで、そのワンマンぶりを見せいていた。ここでもその表れとして、突然、絶対的な命令を全国に出したのである。
    - (1)彼は、ドラという平野に、高さ30メートル、幅3メートルの金の像を造った。
    - (2)そして、様々な楽器が奏でる音を聞いたなら、全国民は直ちにその場にひれ伏し、金の像を拝まなければならない。もし背くなら、「火の炉の中に投げ込まれる」という命令であった。
    - (3)勿論、一般国民はもとより、政府の高官に至るまで、暴君からの命令と刑罰を恐れてすべての国民が王の命令を守った。
    - (4)それを守らず、金の像を拝まなかったのは、ダニエルの友人たちだけであり、それゆえ彼らは王に呼び出され、確かめられた上、通常より7倍強くした火の炉に投げ込まれることになった。
  2. 不思議に思われることであるが、この出来事の記述に、ダニエルは登場しない。彼の3人の友人たちだけである。
    - (1)恐らく、彼は、仕事上の理由で、この間、たまたま、遠方に行っていたのであろう。
    - (2)しかし、それにもかかわらず、この3人の友人たちの生き方をあえて聖書が記したのは、本書の主人公ダニエルの強い信仰は、単に彼一人だけのユニークで、まれな信仰ではなく、複数の人々にもシェアされていたものであったことを私たちに伝えたかったからである。
  - 因みに、先週は、①彼らの神への服従に対する決断(Determination)、②関係者への愛の配慮ゆえの知恵と策略、③神様への信頼であった。
  - それでは、ダニエルの友人たちは、金の像を拝めという偶像礼拝を命ずる、この異教の王に、どのように対応したか？それが今日のメイン・テーマである。

## 本 論

### I. 一言で言うなら、それは、彼らの「神に対する献身」であった。明確・明瞭な「献身」の表明と実践こそが、クリスチャンが世に生き、世の勢力に勝利する道である。

#### A. 「献身」とは、別の言葉、別の角度から言うなら：

1. 神さまに対する「コミットメント」であり、
2. 神さまの前に「全面降伏」(Complete Surrender)することである。
3. それらが、共通して主張することは、神様の主権と勝利を認め、自分の全部を神様に、全面的に神のものとして、お捧げし、渡してしまうことである。
4. リック・ウォーレンは、その著書で言う。「今日、降伏/Surrender」という言葉は、服従という言葉同様に、極めて人気のないものである。その理由は、それらが、積極志向を強調する現代社会、文化の風潮からみると、余りにネガティブなものであるからである」と。

#### B. しかし、聖書のメッセージは、この世の風潮に反して、「真の勝利は、私たちが神様に敗北するところから始まる」と宣言する。

1. 神様に降参し、全部を明け渡し、捧げることなくして、まことの勝利はない。
2. 礼拝の原語は、「ひざまずく」「ひれ伏す」から来ている。即ち、神様を礼拝する者とは、神様に負けを認め、全面降伏し、すべてを神様に明け渡し、捧げる者である。
3. それをして、経験をしたのが、ヤコブである。
  - (1)川岸で、神様と相撲を取り、自分の力で勝とうとしている間は、勝利を経験することはできなかった。
  - (2)しかし、自分の力では勝てないと知り、負けを認め、神様の足に縋り付いて祈ったとき、神様から勝利の宣言を頂き、それを経験した。
4. パウロは更に言う、神様に降伏し、自分を全部捧げる献身こそが、神さまが私たちに求めている「礼拝」の本質であると。即ち、ローマ人への手紙12章1節である

- (1) パウロは言う。「それゆえに神様のもろもろの愛とあわれみのゆえにお願いします」。  
即ち、ローマ書 1-11 章に記されている神様の愛と救いの御業に感謝して、
- (2) 自分の全部を生贄、捧げものとして神様に捧げる
- (3) それが私たちのなすべき礼拝であると。
- (4) 私たちのなすべき礼拝とは、ある意味で、礼拝所で立ったり、座ったりしながら、素晴らしい賛美を捧げることも、メッセージを熱心に聞くことでもない。
- (5) 私たちがなすべき礼拝とは、賛美とメッセージに促されながら、自分を生きた供え物として、即ち、実生活の中で、自分を神様に捧げて生きることである。これなくして、礼拝とは言えない。

## II. さて、それでは、ダニエルの友人たちの、「神様に対する献身」の姿をもう少し詳しく見たい。16-18 節

### A. 第一に、彼らの献身は、神様に対する信仰と信頼が、その基本と中心にあった。

1. 即ち、17 節、「私たちの仕える神は、火の燃える炉から私たちを救い出すことができます。王よ。神は私たちをあなたの手から救い出します。」
2. 何と言う。強い信仰か?! 「王よ、あなたの手から」とは王への挑戦的言葉でもある。
3. 私たちの献身は、昔の日本の特攻隊の人々がしばしば感じたような、どこか悲壮的な、どこか惨めな雰囲気のものではない。
4. そんなどこか消極的なものではなく、もっと積極的で、ポジティブな希望と信頼に満ちたものであった。
5. まず彼らは、神様の愛を信じていた。
  - (1) 「神様は、私たちを必ず救う」と彼らが言うとき、それは、彼らの神様の愛への信頼の表われ、告白であった。
  - (2) 「神様は、わたしたちを愛しているから、決して私たちを見捨てることはない」と言う信頼と信仰である。
6. 次に、彼らは、神様の力を信じていた。
  - (1) 彼らは言う。「私たちの仕える神は、火の燃える炉から私たちを救い出すことができます」と。即ち、彼らは「できます」と言った。
  - (2) 彼らは、不能、無能な神ではなく、全能の神を信じていた。だから、彼らは、自分たちの命も何かも全部を神様に委ねることができたのである。
  - (3) これはアブラハムがいとし子であるイサクを生贄として捧げたとき、そうすることができたのは、彼が、神様を復活の神と信じていたからである。ヘブル 11 章 17、19 節
7. 多くの人々が、神様にすべてを捧げられないで自分で握りしめているのは、このような神への信頼が欠如しているからである。

### B. 第二に彼らの献身は、自らの愛と誠実を最後まで神様に尽くすことであった。

1. 即ち、彼らは言った。18 節「しかし、もし(たとい)そうでなくても、王よ、ご承知ください。私たちは、あなたの神々に仕えず、あなたが立てた金の像も拝むこともしません」と。
2. 一方で、彼らは、神様の全能を信じるからこそ、希望をもって、神様にすべてを委ねたが、同時に、それはすべてではなかった。
3. 彼らは、もう一方で、彼らが、神様にすべてを捧げるのは、その結果がどうであろうと、即ち、たとえ殺されても、絶対に私は神様だけを愛し仕えたいからであると明言した。
4. ここに、宗教と信仰の最大かつ最深奥の問題がある。即ち、あなたは結局何のために神様を信じているのですか? という課題である。
  - (1) その宗教に熱心であるか、どうかは、本当の課題ではない。
  - (2) 何のためにそんなに熱心なのか、という動機の問題である。
  - (3) そして、それは究極、「神さま VS 自分」となる。即ち、自分のために(ご利益のために)信じているのか? それとも神様のためなのか? である。
  - (4) パウロも I コリント 13 章で言う。たとい：
    - 山を移すような大きな信仰があっても、
    - 天使のように天来の言葉を伝えるメッセージができて、

●自分の命と財産を張っても人のために生きる行為と奉仕があっても(これらは皆、宗教が奨励し、宗教家、信者たちが目指すものである)、  
もし愛がないなら、すべては意味がないと。

(5) 神様が求めているのは、ご利益あるなしに関わらず、神様を愛する人であり、物事や状況にかかわらず、誠実に神様を信頼し、従う人である。

5. ダニエルの友人たちは、「たといそうでなくても」即ち、「たとい神様が私たちを火の炉の中から救ってくださらずに、私たちが黒焦げになって死んだとしても、私たちは、王の造った神ならぬ金の像を拝んで、偶像礼拝をするようなことはいたしません」と言って、命を懸けて、神様への忠誠と愛を宣言した。
6. このことの重要性は、結婚生活、夫婦生活においても、信仰生活においても同じである。
  - (1) 結婚式で私たちは誓う：病気のときも、健康なときも、貧しいときも、裕福なときも、どんなときも、これを愛し、これを支え、慰め、・・・その節操を固く守ることを誓います、と。
  - (2) 夫婦の関係のすばらしさは、これをどのくらい誠実に実行しているかにかかっている。
  - (3) 信仰生活においても同じである。私たちは、神様にどんな状況にあっても、変わらない誠実を表しているか？
  - (4) 即ち、私たちは、たとい自分に試練、苦難が押し寄せ、殺されるようなことがあっても、ダニエルの友人たちと同じように、「たといそうでなくても、私は王の造られた金の像を拝みません」と言って、主への誠実を宣言しているだろうか？

## 結 論

- この出来事は、彼らの主に対する「全き献身」への主の見事な応答で締め括られる。
- ネブカデネザル王が驚嘆・驚愕した。それは、彼が命令して火の炉に投げ込んだのは3人だったはずなのに、直後に見ると、彼らが燃え尽きるどころか、何の害も受けずに、しかも4人になって火の中を歩いていたからである。そして王は言った。その4人目は、神々の子のごとく。
- それは言うまでもなく、三位一体の第二位の神「イエス様」の顕現である。
- イエス様は、ダニエルの友人たちのように、「たといそうでなくても」と自らを神に捧げ、委ね、コミットする人といつも共にいて、守り、支えてくださる。
- そのいつも共にいてくださる神様の臨在こそが、私たちが、世にクリスチャンとして生きるために必要なことである。
- そして、神様がクリスチャンと共にいて下さると言うこの事実は、周囲の未信者の目にも明らかになる。ここでもネブカデネザル王の目にそれが留まった。そして、彼の心の中に信仰の種を植え付けていくのである。これが本当の宣教の証しである。
- 私の尊敬するインマヌエル教団の創立者故郷田二雄(つぎお)師は、第二次戦時中、天皇を神と礼拝しなかった信仰のゆえに、教会閉鎖、すべてを没収され、投獄され、終戦まで2年間の独房生活。その中で彼を支えたのは、イムマヌエル、即ち、神は共にいますと言う事実であった。彼は独房でも一人ではなかった。いつもそこに神様がいた。
- イザヤを通して神は言われる。「あなたが水の中を過ぎる時も、私はあなたと共におり、川を渡るときも、あなたは押し流されない。火の中をあるいても、あなたは焼かれず、炎はあなたに燃えつかない」(イザヤ43:2、4、5)と。これが正にダニエルの友人たちに起こったのである。ハレルヤ。